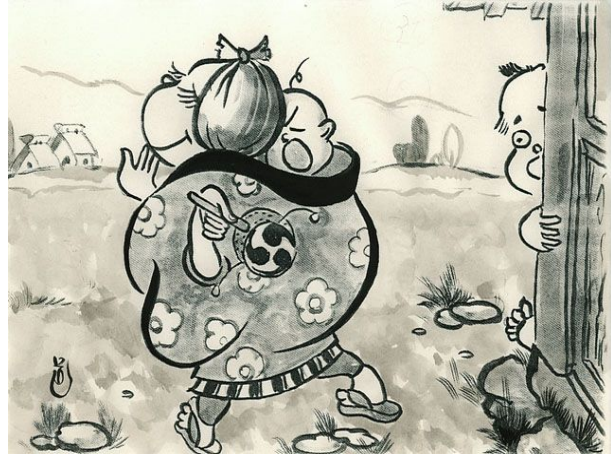


ふるさとの民話 （第三十九話）

『かなはんのべやさ（下女）』

飯川のかなはんに、たいへん、のん気というか、ものに動じない「べやさ」がいた。下男たちも、彼女には、まったく、頭が上がらない。そこで、下男たちは、一度、びっくりさせてやろうと、一計を案じた。



夏に昼下がり、「べやさ」が、うとうとしているのを、下男たちが、そっと、かつぎ上げ、飯川の大池の土手へ運び、寝かせた。

とつぷり、日が沈んだ頃、やっと、彼女は、大きなあくびをして、目を覚ました。あたりを見渡し、あわてて、奉公先に帰るやいなや、下男たちを集めて、大声でいわく、「奉公先の、大事なべやさが、盗まれたのも、知らないでおるのか。」と…。

（山下 郁雄 集録）

→